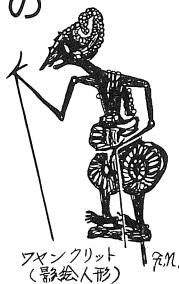


インドネシアの ジャガイモ 会議

中村 文夫



いものいの字も知らなかった私が、いも類班長の仕事を綱渡りの一年半も勤めてしまった。そこで、この一年半の仕事のなかからいくつか思いつまままを書きとめてみた。

★

まずは、我が国のジャガイモ（馬鈴薯）の縁の地＝インドネシア＝について述べることにする。昭和61年12月、国際協力事業団（JICA）の調査団に参加してインドネシアに出張した。目的はインドネシアの馬鈴薯と大豆の生産の基礎条件ともいべき種いもと種子の増殖配布体制の強化に関する調査の事前協議である。

すでに3年前、スハルト大統領自らFAOの総会において、米の自給達成を報告していることから、いまインドネシアでは、米に次ぐ第二食用作物である大豆、トウモロコシ、サツマイモ、キャッサバ、マングビーン（緑豆＝日本ではモヤシ用）などの生産振興に力を注いでいるところである。特に大豆は国民の廉価な蛋白源として確保をめざしている。

インドネシアには“テンベ”という伝統食品があり、これは大豆を発酵し、乾燥させたもので保存性も高く、食べるときは油で揚げたりする。日本人の食卓の豆腐、納豆などの大豆食品に当たるものであろうか。

なお、米については、自給を達成したとはいえず、86年産は抵抗性品種にも害を与える新しい生態型（バイオタイプ）のトビイロウンカが大発生し相当な被害を出したようであった。このため、大統領自らその対策に乗り出し、テレビ放送や幹線道路の横断幕などによる宣伝キャンペーンのほか、有機水銀系農薬の使用を禁止していることから、インドネシアを世界的有機リン剤の墓場にしてみよからウンカを徹底的に撲滅せよと、農薬の緊急輸入の至上命令を出した。

おかげで日本大使館の農務官はこの農薬輸出要請を受け、その調整でテンテコ舞いということであっ

た。

さて、本題の馬鈴薯であるが、周知のとおり、馬鈴薯は江戸時代の初め頃ジャワから南蛮貿易により長崎にもたらされたことから、ジャガタライモそしてジャガイモと呼ばれわが国でも栽培されるようになった。

つまり、南米ペルー付近を原産地とする馬鈴薯がヨーロッパを経て、オランダ人がその植民地（東インド会社）であるジャワ（つまりインドネシアのジャワ島）に持ち込みそれが日本に伝えられたわけである。

それはさておき、この馬鈴薯はインドネシアではかつての宗主国のオランダ人たち支配階級の食べものであったことから高級野菜として取り扱われてきた。

しかし、独立後40年近くたった現在、天然資源である石油、天然ガスなどにも恵まれ経済成長も進みそれとともに国民の食生活も向上してきた。そのような中で馬鈴薯も次第にふつうの野菜と同じように国民の食卓に上るようになったようである。このため国として、第二食用作物に加え、馬鈴薯の生産拡大を進めようとしているのである。

この辺で、今回の出張で見聞したインドネシアの馬鈴薯についてふれてみる。

ひとつは、会議に出た昼食である。インドネシア農業省での会議が熱心に行なわれ、12時半をかなり過ぎたころ、議長の農業省作物総局計画局長のソルビアティ女史が（インドネシアでは、役職についている女性公務員が比較的多いとのこと）、15分間の休憩を告げた。

そこへ、紙のランチボックスと紙容器入りのTeh（砂糖入りの茶）が、各出席者の前に配られた。そのランチボックスが、なんとあのケンタッキーフライドチキンのそれで、中味は小さめのフレンチフライドポテトが10本ほどとそれに唐辛子のきいたペースト、あまり肉のついていないフライドチキンが2本というものであった。翌日の会議の昼食にも同じものが出た。

いまひとつは、会議の前、調査をかねたジャカルタ市内見学の際に行った近代的な六階建てのスーパーマーケットの食品売り場の冷凍ボックスである。ボックスの中で、アメリカとニュージーランドから輸入された冷凍フレンチフライドポテト類が幅をき

かしているのが目についた。

価格は日本より高く300gで2,750ルピア（275円）であった。因みに米は5kg, 4,750ルピア（475円）、大豆は1kg, 475ルピア（47.5円）であった。また、別の大型スーパーの店先のファーストフードレストランでも、若い人がフレンチフライドポテトを食べていた。

このことを会議の際に園芸作物局長に尋ねると、インドネシアでは馬鈴薯をスープにしたり、牛肉（豚肉は回教国なので食べない）と煮たり、油でいためたりして食べるのがふつうだが、最近、フレンチフライなどの食べ方が増えており、このためアメリカやオーストラリア、ニュージーランドからの輸入が増加しているという答えが返ってきた。

因みにわが国でも繁盛しているファーストフードやファミリーレストランの消費を中心に、近年の円高やアメリカから農産物輸出攻勢も加わり冷凍フレンチフライドポテトの輸入が急増している。

ところが、インドネシアは一方では南スマトラを中心に対岸の隣国であるシンガポール、マレーシアに馬鈴薯を輸出しており、シンガポールの市場の10%以上を占めているとのことであった。

今回の協議の対象である種いもの生産流通については、わが国では、国営の農場において原原種を生産し、それを北海道をはじめとする道や県から委託された採種農協が増殖し、種いものを生産するという一貫した体系があるのに対し、インドネシアでは、一応国の園芸研究所で原原種を生産し、それを公立の種苗センターで増殖し、さらに種いもの生産農家が生産するという我が国と同様の体系があるものの、その流通量は全体の10%たらずで、大半は西ドイツ、オランダ、デンマーク等から輸入した種いものをそのまま流通したり、民間の業者がそれを農家に委託し増殖してから流通させているとのことであった。

「それでは、日本の種いものを輸入することはありうるか。」と尋ねると、園芸局長は苦笑いをした。そこで「われわれは、貴国で種いものが自給できるように技術協力するための協議に来たのでしたね。」という大笑いになった。

現在、この協議にもとづき、インドネシアと我が国とで、インドネシアの馬鈴薯と大豆の種いものと種子の配布体制の強化について、現地の調査をふくめた開発調査を行っており、その結果をもって本格的

に技術協力が展開されることになるろう。

また、レンバンにある園芸研究所には、これまでも種苗管理センターから検定の専門家を派遣してきたところであるが、今年も増殖の専門家を派遣することを予定している。

今後、このような海外への技術協力（研修生の受け入れも含め）の要請がふえることが予想され、これを種苗管理センターの主要な業務の一つとして考える時期に来ていると思う。

ところで今回の出張で、国際協力や開発援助ということに関心を持つことが出来た。

アメリカをはじめ先進国はこれまで開発途上国の援助をしており、開発途上国もそれにより経済成長を遂げてきた。そして、近年開発途上国は援助でうけた債務を農産物や天然資源などの輸出により返済しようとしている。

しかし、アメリカやECなど先進国では農産物が過剰であるうえ、低成長経済、貿易収支悪化などの状態の中、開発途上国の農産物を輸入するどころか、前述のフレンチフライドポテトではないが、むしろ反対に農産物を輸出している。

インドネシアでは、これまで石油、天然ガスや木材など輸出により外貨を得て、経済的なバランスを保とうとしてきたが、近年の石油価格の下落などから経済的窮地に立たされている。このため援助を受け入れる予算（カウンターバジェット）の確保にも問題があるといわれている。

このような状況は、インドネシアばかりでなく多くの開発途上国で大なり小なり見られるという。これを解決するには、債権者である先進国が債務の金利引下げをすとか、償還期限を延長すとか、新たな投資（融資）により生産性の高い工業部門を強化し輸出力を促進すとか、農産物の輸入を受入れるとかの方策が考えられよう。

また、開発途上国側も一方的な依存ばかりでなく、農業生産力の向上による食糧の安定確保や工業生産の拡大による輸出力の強化などを図る必要があるろう。

★

今後、国際協力には数多くの問題がある。

しかし、まずはお互いの国の立場を理解し合うことだと思う。そのためか最近、書店に行ってもインドネシア関係の本が目につく。まず手初めに深田祐介の「神鷹商人」あたりから手をつけようかと思っている。